

The Birth of Insight:

Meditation, Modern Buddhism & The Burmese Monk LEDI SAYADAW

by Erik Braun

The University of Chicago Press 2013

金澤 豊 (Yutaka Kanazawa)

龍谷大学世界仏教文化研究センター 博士研究員

(Postdoctoral Fellow, Research Center for World Buddhist Cultures)

エリック・ブラウン博士（オクラホマ大学教授）による *The Birth of Insight*（邦題『洞察の誕生：瞑想・現代仏教・ビルマ僧レーディ・サヤドー』）は、チベット仏教学者として高名なドナルド・ロペス博士（ミシガン大学教授）監修による「仏教と現代（Buddhism and Modernity）」叢書の一冊として 2013 年に出版された。

ブラウン氏は、主に 20 世紀初頭にビルマで大衆の修行として発展した洞察の瞑想（Insight Meditation, vipassanā）を研究対象としている。2014 年に沼田智秀仏教書籍最優秀賞を受賞し 2015 年来日。東京と京都で講演し、洞察の瞑想がビルマだけでなく瞑想を実践する世界中の人々の生き方に影響を与えつつあることを語った。（『世界仏教文化研究センター2015年活動報告書』 p.69）

瞑想自体は、仏教における重要な行法である。近年、テーラワーダ仏教を中心として一般の人々が瞑想に注目し、アメリカでは曹洞禅やチベット仏教のトレンドを巻き込んでマインドフルネス瞑想の運動へと展開している。2014 年に雑誌『TIME』で特集が組まれたことは、その顕著な例と言えるだろう。（2014 年 2 月 3 日号「The Mindful Revolution」）さて、本書は 20 世紀のビルマにおいてアビダンマ文献（仏の教えを註釈整理した聖典）が大衆化したことを理解するために、19 世紀から 20 世紀にかけて活躍した仏教僧レーディ・サヤドー（1846-1923）の人生を追って考察し、彼の功績をまとめている。また、今日のテーラワーダ仏教において重要な位置を占める「洞察の瞑想」が、ビルマを超えて西洋世界に広がっていくきっかけになった人物としてレーディ・サヤドーを位置づけるものである。巻末には、詳細な註釈、先行研究、インデックスとともに、パーリ語とビルマ語の語彙集も収録されており理解の助けになる。

第 1 章は、19 世紀前半のビルマの状況とレーディの半生を記す章である。1846 年にマンダレーから約 100 キロの場所にあるモンユワ地区に生まれたレーディは、10 歳から近所の寺で学び始め 15 歳で出家、20 歳で正式な比丘となる。アビダンマの研究に優れた才能を発揮し、後にアビダンマの学びと大衆の瞑想とを結びつけることを可能にする素地が出来上がった。当時のコンバウン王朝のミンドン王が、仏教教学の振興を図っていたことは、彼にとっても幸運であった。ミンドン王は、1871 年に首都マンダレーで第五結集を実施した

ことで名高い。レーディはその歴史的結集に参加し、Kathāvatthu の合誦を担当した。仏教を保護したミンドン王が 1878 年に失脚したのち、ビルマは 1886 年からイギリスの植民地となりインド領に併合される。時代の潮目においてレーディは、活発に執筆活動を行った。特にアビダンマを出家僧侶だけではなく、一般大衆に向けて解説し、日常文語を用いて瞑想マニュアルを執筆した。また、イギリス文化の流入に争う形で、牛を保護することを訴える書物を出版し、活動の中心地をマンダレーから故郷モンユワへと移していく。このように「洞察の瞑想」が誕生する歴史的背景を伺い知ることができる章である。

第 2 章は「注釈書大戦 (The Great War of the Commentaries)」と名付けられ、レーディが 1897 年に出版したアビダンマ注釈書 (Pramatthadīpanī : Manual on the Ultimates) が引き起こした論争について描かれている。出版後、レーディの著作は焚書され、抗議デモ、批難する報道に晒された。さらには反論の書が相次いで出版されたという。しかし、レーディ自身は批判に対してオーソドックスな教義理解に基づいた反論をし事態は収束する。当時、イギリス植民地下におけるビルマ仏教界は、アビダンマの権威そのものが「最前線の砦 (front-line fortress)」でもあった。したがって、レーディのアビダンマに対する新たな理解という誤解が、論争の火種になったのだ。結果、この論争はアビダンマに対する大衆の関心を高め、在家の人々がアビダンマを学ぶ重要な契機になったと著者は述べている。

第 3 章では、仏教を保護する方法としてレーディが取った手段、ビルマで広く布教を展開した様子が描かれる。一般大衆にもわかりやすい言葉で話をするレーディに対し、前章で述べられた容赦ない批判が展開されていたが、結果としてレーディを支持する多くの仏教徒が生まれることになる。それは、エリート僧侶にのみ理解されてきたアビダンマが「雨が降り注ぐ」ように大衆に広がっていったことを意味する。レーディの説いた内容は、基礎的なアビダンマを中心としたものであり、モンユワのレーディ寺院には、彼の法話を石に刻みつけたものが今も残されている。

第 4 章には、植民地期のビルマにおいて、レーディが「最も有名な僧侶」「著名な作家」として位置付けられるようになった経緯が示されている。特に、アビダンマの根本原理概説 (Paramattha saṃ khip' : Summary of the Ultimates) が大衆に広がったことについて偈頌を中心に説明する。偈頌の形式で書かれたこの書物は、一般の人々が生活する上で瞑想に関する学びを深めることができるものである。瞑想の実践段階を設定し、実用的なものとして受け入れられた。一般大衆も涅槃に到達できることを主訴としており、アビダンマは人々が悟りに至るために学ばれることになった。

第 5 章において著者ブラウン氏が強調するのは、レーディがアビダンマの学びに基づき僧侶が長期にわたる修行をする方法とは別の瞑想方法を提示する事である。もちろん、それは『清浄道論』(Visuddhimagga) など権威あるパーリ聖典に明示されるものであり、オリジナルの方法ではない。具体的な方法として瞑想の初期段階において sukkhavipassanā (乾観:dry-visioned) を選択し、完全ではないにしても心を鎮める止の行 (samatha) を省略できるとしたのだ。単純明解に示された瞑想法は多くの人を洞察の瞑想に入らしめ、そのレー

ディの努力を多くの瞑想者が支持した。こうしてレーディは仏教に於ける瞑想修行の最前線の人物となり、これまで以上に「悟り」の門戸を広げ、人々に実践可能な選択肢を増やしたと言える。

最後にブラウン氏は、レーディの示した道が、洞察の瞑想実践（修行）と学び（学問）の両方が必要であることを強調したことに功績があったと述べている。1923年のレーディ亡き後も、サヤーテッジー、ウバキン、ミングンサヤドー、マハーシサヤドーといったビルマの偉大な修行者に大きな影響を与えたことはもちろん、インドやスリランカ、彼らを慕うアメリカ人たちによって、ビルマ国外へと洞察の瞑想は広がっていった。それは結果的に、学ぶこと（アビダンマの理解）を抜きにして瞑想だけが受け入れられた過程でもあったとも著者は講演会で述べている。（『世界仏教文化研究センター2015年活動報告書』p.80）こうしてブラウン氏はレーディ・サヤドーの功績を抽出し、その活躍の背景となるビルマ仏教の抱えてきた問題にも巻末に挙げられる多大な参考資料に基づき言及した。ただし、複雑に入り組んでいる政治と宗教の問題を分かりやすく示したせいで、読者はそれらを理解できた気になるかもしれない。そうすると、背後にあるビルマ仏教の問題の厚みを見逃すことになるだろう。言うまでもないが、そのことが本書の価値を落とすことにはならない。本書に記された20世紀前半のビルマ仏教は、これまで知られてきたものに加えらるべき新たな視座と言える。

日本でも2000年代から顕著なテーラワーダ仏教の流行は、決して一過性のものではない。おそらく、本書が明らかにしたようにテーラワーダで重要視される洞察の瞑想（ヴィパッサナー）自体が流行に左右されるものではなく、レーディ・サヤドーが開展した伝統なのである。レーディが重視したアビダンマの伝統に光を当てた本書の登場によって、一層、テーラワーダ仏教のアビダンマ理解が多くの人に広まることが望まれる。寡聞にして情報は得ていないが、本書の邦訳出版が待ち遠しい。

本書評を執筆するにあたり天野和公氏（みんなの寺 坊守）よりアドバイスを頂戴した。記して感謝申し上げます。

Bibliographic information

Format: 280 pages

Publisher: University Of Chicago Press; Reprint edition

Publication Date: November 19, 2013

Language: English

ISBN-10: 022641857X

ISBN-13: 978-0226418575